

令和4年度第3回野洲市社会教育委員会議（概要報告）

会議日時	令和4年2月3日（金曜日） 13時30分～15時30分
会議場所	市役所2階 第5会議室
出席者	社会教育委員 出席：中出委員、光永委員、駒井委員、福森委員、木村委員、鷺田委員、西川委員、高木委員、小澤委員 事務局：西村教育長、馬野教育部長、北脇教育部次長、井上教育部次長（生涯学習スポーツ課）井狩課長、菱沼参事、岡山
傍聴人	なし

【教育長あいさつ】

（全国教育長会で取り上げられた、長崎の空き家が増えて過疎化が進んでいる状況について、地域で解決に向けて動き出していることを解説）

子どもたちにどのように故郷について教えていくか、それがコミュニティ・スクール、地域で大人から子どもまで、皆が学校を核にしながらか支え合って生活をしていきますっていうのは、まさにそれと繋がる。

【市内小学校教員によるいじめにかかる報告書について（井上教育部次長より）】

（事案発生の内容・経緯と今後の再発防止策について概要報告）

教員によってマイナスイメージを投影したり、子どもをけなしたり、あるいは子どもと障がいの問題であったりっていう発言が起こった。

そこに共通していたのは、「子どものことをどう見るのか」ということであつたと考えている。まだまだ発達途上にある子どもに対して、教員の言動が与える影響というのは非常に大きいものがあるということを、今一度教員として自分達の言動のあり方を振り返る必要があると思っている。

保護者との連携、繋がりがどこまでできていたのかという点や、学校のみならず、教育委員会事務局においても組織的な対応ができていなかった点から、対応に不備を生じてしまった。

再発防止策1：同僚性の構築

→教職員同士の同僚性を高めていく必要があるということが今回見えてきた。学校教職員がお互いにフォローし合ったり、あるいは気軽にいろんなことを相談し合ったり、わからないことを質問しあったりする同僚性の構築が必要。

再発防止策2：複数の目で子どもたちを見ていく

→他学年での成果指導、あるいは交換授業、地域の人たちの協力も視野に入れて、複数の目で子どもたちを見ていく。

再発防止策3：人間力を磨く

→授業に関する研修だけではなくて、人間力を磨くという発想を持って自己啓発を行っていく。

子どもたちにとって安心できる学校作り、保護者が安心して子どもを送り出せる学校作り、そして地域から信頼を得られる学校作りのために、教職員、学校、そして教育委員会は自らを真摯に見つめ、反省し、再発防止に努めていかなければならない。

高木委員長：世界がそうであるように、特別支援学校については、10年もすれば無くなるのでは、と思っている。日本の現状が分離型社会になっていて、国連はそれに対してソーシャルインクルージョン（包摂）で社会一体で育てていこうというように呼び掛けている。「報告書を出して終わり」ではなく、野洲市として段階を踏んで行動様式・具体性のある方針を出してほしい。

【議事】

(1) 令和4年度の生涯学習振興計画の実績報告と令和5年度の取り組みについて

→別紙の通り

(2) 意見交換

- ・野洲市の教育・生涯学習の現状と課題について
～「生涯学習振興計画 第3期」の策定を目指して～
- ・社会教育委員としてそれぞれができること

(主な意見)

- 委員 行政が主体でやるのではなく、地域が動いて、自分たちを中心に行動していくことが大切である。コミュニティスクールについては、校長自身が考え、部屋から出て様々な場所に出向き、出会うことで開かれていくものがある。
小中学校ならば、「自分たちが高まるために自分たちの学校へどういう人たちが来てもらったら良いか」というのを考えて、子どもたちが企画する。そして企業にお願いしていく。そういうスタイルを取れば企業も気持ちよく出ていってくれると思う。だからそういう仕掛けを、校長に営業をしてもらおうとよりよいのかもしれない。
来年の今頃には、「社会教育委員としてこんなことをした」と各委員からの報告会のような形ができればいいと考えている。
- 委員 読書ボランティアが、読み聞かせの方法について子どもたちに教えたことで、教えを受けた子どもたちが今度は保育園へ読み聞かせに行く、といった学びの循環が生じている例もある。
三上山にこの前子どもたちを登らせたが、地域の力というものはすごい。生徒30数名に対し、地域の方々が20数名きて、登るサポート、途中で待ってくれるサポート、ふもとで豚汁を提供するサポートをされた。子どもたちも、「今度手伝ってくれる？」と聞いてみれば今度はサポートする側に回ってくれるかもしれない。そういう学びの働きかけが大切だと思う。
- 委員 例えば近江八幡市では、子どもたちが中心となって企画から実施まで子どもたち自身で実施する音楽祭という取り組みをされている。こういう取り組みも参考にできる。

野洲市と文化協会が共催する文化芸術祭について、加盟団体しか参加できない、というのが結果として参加の閾口を狭めている。加盟すれば、「役が当たる」という負のイメージで参加されないところもある。出演料を取る形でもいいので、加盟非加盟に限らず広く様々な若手や伝統芸能を引き継ぐ団体も参加できるように、しくみづくりや市の方針を示してほしい。

また、文化・スポーツ部門が首長部局に移管することでメリットがあるのか。生涯学習と切り離されることに不安を感じる。

- 委員 この時代の担い手を育成するのは、直接的にその子どもたちに焦点当てて行う取り組みもあれば、そういう育成する人たちを育成する部分も大事だなと思う。

やっぱり現在、社会教育とか地域の教育力ってところが今弱まってるといふふうな要因が背景にあり、そこを引き寄せてやっぱり社会教育委員は論議していくということも必要だと感じている。

コミスクを始めることで、やはりいろんな人が地域の方が学校をプラットフォームとして来てもらって、教育だけじゃなくて、福祉、それこそ社協の方が家庭教育をやるとかそういう方もどんどん入ってきてくれるような地域コミュニティにしていきたいというふうなことを学校は考えている。

- 委員 各分野では、担当課がそれぞれ必死に努力されているのだと思う。が、現実にはバラバラに動いていて、そこでとどまっているのが現実。全体的な情報に基づいた形の中でやっていかないと、「結局これだけしかできない」という形で終わってしまうと思う。

(コミュニティ・スクールに関して) 野洲には企業もたくさんある。校長として売り込みをかけるように、企業先に赴いて生徒たちの学びの循環となる場の確保に向けて動いている。

- 委員 家庭教育支援研修会で、中主地域の方々も小学校の校長先生をはじめ多く集まっていた。

自分が社会教育委員としてできることを考え、この4月からスクールガードとして朝立っており、そうすることで不登校の子の存在に気付く等、見えてくるものがあった。家庭教育支援は本当に今、必要とされていると考えている。

- 委員 地域のおっちゃんおばちゃんとかであれば、学校だけでは目が届かない一人一人の取り組みとかに焦点当てて見てくれたりとか、育ててくれることもできる。社会福祉協議会としても、子どもを巻き込みながら自治会や老人クラブなどの地域コミュニティの活性化を図れないか、という考えが出ている。

- 委員 2028年度高専が立ち上がるって話の中で「企業を取り込んで、する」という表現があった。企業側としても、学校から声がかかるのを待っているところもある。

先生からのお声かけがあったからこそ、学校と繋がりを得て、さらにつながりが広がりほかの学校から呼ばれることが増えた。

●委員 進捗管理シートの見方がわかりづらい。

主な取り組みがあつて、それに対してこういうことをやりましたっていうのは、多分実績であると思うけれども、その評価にあたって、目指す姿が、次世代に繋ぐ担い手の育成であれば、それをやって、どういう現象が起こったのかっていうところは、もうちょっと簡潔でいいので、部署というかテーマによって書いていただけたらわかりやすかったと思う。

社協さんとのつながりの中で、不登校さんの居場所を月に1回さしていただいているんですけども、学校の先生方がこういう場所が地域にあるよっていうことを知ってれているおかげで学校と地域の連携が取れてきているのを感じる。

◎その他連絡事項

(1) 【報告】令和4年度滋賀県社会教育研究大会について

→今後も研修の案内を継続するので、他市町との交流・つながり作りの場として活用していただきたい旨を説明。

(2) 令和5年度近畿地区社会教育研究大会（滋賀大会）について

→県理事会及び実行委員会による決定で順次詳細は決定していくので、また追って情報提供する旨を伝達。